第 18 回　日本生殖心理学会・学術集会【WEB 開催】

パネルディスカッション

【WEB 開催】，2021．2．28－3．6

「症例提示とコミュニケーション、院内多職種連携のありかた　　②治療中

田中久美子

HORAC グランフロント大阪クリニック

　不妊治療中にはさまざまなストレスに晒されるが、生殖時期という人生の重要で濃密な時間を過ごす時であるため、過去のトラウマや未解決なこころの課題と向き合わざるを得ない局面に遭遇する患者は少なくない。
WMA Medical Ethics　Manual の医の倫理マニュアルによれば「医療はサイエンス（science）であると同時にアート（art）である。サイエンスは観察できることや計量できる事柄を扱うため、有能な医師であれば、疾患の兆候を認識し、健康を回復する術を知っている。しかし、サイエンスとしての医療には、特に人それぞれの個性、文化、宗教、自由、権利、責任に関わる部分において限界がある。医療のアートとしての側面とは、サイエンスとしての医学と技術を個々の患者、家族、そして地域社会 ― これらは同じものが 2 つとない ― に対して適用することである」と記されている。
今やエビデンス（Evidence）が隆盛の時代であることは論を持たないが、心理臨床においては原点と言われている事例研究に力を注ぐことにも一定の価値はあると思われる。
　生殖医療分野における心理臨床は、クリニックや病院など治療施設の方針や特色によって提供しているものが異なるのが特徴としてあげられる。今回は、過去のトラウマ体験に悩まされ、子どもを授かることが出来ないことを契機に生殖補助治療施施設を受診し、妊娠・出産に至った 30 代前半の女性の症例を提示し、当院における院内でのコミュニケーションや多職種連携をめぐっての臨床実践の報告及び考察をしたい（ご本人の承諾を得ており、倫理的配慮をしている）。